

I 共通問題

村上春樹は、小説家を目指す人間に次のような助言を与えている。

「それで僕は思うのですが、小説家になろうという人にとって重要なのは、とりあえず本をたくさん読むことでしょう。実にありきたりな答えで申し訳ないのですが、これはやはり小説を書くための何より大事な、欠かせない訓練になると思います。小説を書くためには、小説というのがどういう成り立ちのものなのか、それを基本から体感として理解しなくてはなりません。「オムレツを作るためにはまず卵を割らなくてはならない」というのと同じくらい当たり前のことですね。」

村上春樹『職業としての小説家』

【設問】小説家に限らず、何かを書こうとする人間についても同様のことが言える。そこで、現代文芸コースで学びたいことを最初に明記し、次いで、その思いにいたる過程で何らかの影響を受けた本(文学作品には限定しない)を5冊あげ、そこに書かれている何にどのような刺激をもらったのか、具体的に論ぜよ。

II. 選択問題 次のII-1～II-4の中から1題選択し、解答せよ。

* 解答文の冒頭には、設問番号(例: II-2)を明記すること。

II-1: 下の文章を読み、小説の言葉と写真や映画のまなざしが結ぶ関係について、たとえば「機械的なまなざし」のように、プルースト以外の具体的作品を例に挙げながら論じること。

[...]『映画の理論』(1960)と『歴史——最後の前の最後のことども』では、クラカウアーはそれぞれ映画と歴史叙述の特徴を分析するにあたって、『失われた時を求めて』の第三篇『ゲルマンのほう』のなかのプルーストが突然旅行から家に帰ってきて、祖母をそれと気づかれることなく見て一瞬それが祖母だと見分けることができないでいるくだりに一度ならず言及している。その忘れがたいくだりの一部を読み返してみよう。

わたしはといえば[……]帽子をかぶり、旅行用のコートを着た証人、目撃者、この家の者でない外来の客、二度と見られない場所を撮りにきた写真師でしかなかった。わたしが祖母の姿を認めたとき、わたしの目が機械的に記録したのは、まさしく一枚の写真であった。[……]はじめて、ほんの一瞬のあいだ、というのはそういう祖母の姿はすぐさま消えてしまったからだが、赤い顔をして、鈍重で俗っぽくて、病を患った、わたしの知らない一人の衰弱しきった老婆が、ランプの下の、長椅子の上に身を横たえて、夢にふけりながら、すこしばかり呆けた目で本に目を通してゐるのを認めたのであった。

プルーストが写真機の平然として動じるところのないレンズにたとえている、対象から距離を置いた、機械的なまなざしをつうじて、物語作者はかれの意に反して、それまで愛が見ることをさまたげてきたもの、すなわち、祖母が死にかけているということを突然了解する。1927年のクラカウアーにとっては「死を恐怖していることのしるし」であった写真は、プルーストをつうじて、その恐怖を乗り越え、死を面と向かって見つめることを可能にしてくれる道具に転化しているのだ。[…]

カルロ・ギンズブルグ『糸と痕跡』(上村忠男訳)

II-2: 下記の文章を読み、「地球全体を内包するシステムのダイナミズム」とはどのようなものであるかを示したうえで、そのような変化が生じた原因や経緯、さらにはそうした変化が私たちの社会や文学に与える影響について、具体的な例を挙げつつ論じよ。

2016年11月16日、オックスフォード英語辞書は2016年の「Word of the Year」を「post-truth (ポスト・トゥルース: 脱真実)」に決定したと発表した。その意味は、「世論形成において、客観的な事実よりも、感情や個人的信条に対する訴えが大きな影響力を持つ状況」であるという。

この決定に際して、主催者たちの念頭に、2016年に立て続けに起こったBrexit (イギリスの国民投票におけるEU離脱賛成多数) やトランプ大統領誕生、そして押取あるいは全世界的に顕著になったポピュリズム政治家の台頭があったことはいままでのまいだろう。

ただし、多くの人びとが“post-truth”という言葉から連想したのは、単に「エモーショナルな訴え」というだけでなく、上記の動静において、頻繁に浮上する「フェイクニュース (偽情報)」問題であった。

(中略)かつて新しい〈公共圏〉となることを期待されたソーシャルメディア空間には、現在、極端な意見や、差別的言辭があふれている。そしてそれらの多くは、フェイクニュースあるいは誤った、虚偽の事実報告にもとづいて発せられる。それらの虚偽は、しばしば「表現の自由」という理念によって弁護される。もしくは、虚偽情報を発したものが、虚偽を批判するものに対して、「そちらがフェイクだ!」との厳しい批判を行う。

反対に、現実批判として、あえてディフォルメされた事実を記述する「パロディ」という行為は危機に瀕している。「パロディ」は、「フェイク」であると批判されるのである。

このような混乱した状況のなかで、われわれは、〈公共圏〉どころか、われわれが長い歴史のなかで築きあげてきた文明そのものを失うのではないかとさえ危惧される。

問題解決の分析として、コミュニケーション論的な分析——とくにソーシャルメディアに特有とされる性格が現在盛んに行われている。それはもちろん重要な分析であることは当然である。しかし同時に、現代の問題が、地球全体を内包する全体システムのダイナミズムから生じていることを忘れてはならない。

(遠藤薫編『ソーシャルメディアと公共性』)

II-3: 以下の四つの文章を読んで、問いにこたえなさい。

雄牛は乗り手の下でどうにか立ち上がろうとしていた。乗っているのは太ったぼさぼさ頭のメキシコ人で、この状況にしぶれを切らして苛立っているようだった。雄牛もいらいらしているようで、いまは立ち上がってじっと動かずにいた。／向かいの正面観覧席の弦楽楽団が、調子はずれの「グアダラハラ」を演奏しはじめた。グアダラハーラ、グアダラハーラー、楽団の半分か歌っていた……

「グ、ア、ダ、ラ、ハ、ラ」ヒューが一つ一つの音を区切って発音した。
下、上、下、下、上、下、下、上、とギターがかき鳴らされた。

(マルカム・ラウリー『火山の下』)

※この問題は、著作権の関係により掲載ができません。

(ガブリエル・ガルシア=マルケス『わが悲しき娼婦たちの思い出』)

ケヴィンは遠慮がちに構わないかと尋ねてから、ラジオを庭に持ちこんだ。マリアンには最初その音が耳障りだった。せつかく牧歌的な気分で脳からα波が出ていたのに、これではぶち壊しだ。しかし時間が経つにつれ、いくつかいいなと思える曲が出てくるようになった。女性歌手が、ドアの外に〈孤独〉が立っている、と歌う曲もその一つだった。“彼女の手には花と炎が同時に燃える、”とか、そんなような歌詞だった。マリアンは最初スコップでリズムを取り、やがて顎を上下に動かしながら聴いた。二度目にこの曲がかかったとき、マリアンは(同じように遠慮がちに)ケヴィンに訊いた。「これ、誰の曲？」

ケヴィンは顔を上げた。「スザンヌ・ヴェガ」

「ふうん」とマリアンは言った。「いいわね」

(ニコルソン・ベイカー『フェルマーダ』)

キャンプをして過ごしたその夏の日々、ロベール、アリーヌと子供たちは山道を歩きながら、スペイン共和国で親しまれていた歌を合唱するのに合わせて行進した。

ア・ラス・バリカーダス
一列になって進む、役立たずだが善良な兵士たちの軍団だ。「バリケードへ、

ア・ラス・バリカーダス ボル・エル・トリウノ・デ・ラ・コンフェデラシオン
バリケードへ、連合の勝利のために」。そうして気がつけば、あつという間

に頂上に着いているのだった。

(キルメン・ウリベ『ムシエ 小さな英雄の物語』)

これらはどれも 20 世紀半ばから 21 世紀にかけて書かれた海外の小説からの引用で、順番は発表された年代に添って、音楽がひびいている場が描かれている。タイトルを引きながら、個々の特徴を指摘し、音楽と人とのかかわりについて自由に述べなさい。

II-4: 以下は、ユージーン・ジョラスが1929年に『トランジション』誌上で行った「言葉の革命マニフェスト」です。このなかの2項目をとりあげて、あなた自身の見解を述べなさい。

1. 英語革命は既成事実である。
2. 夢想世界を探求する想像力は自治独立し、何にも縛られない。
3. 純粹詩とは叙情的絶対であり、われらの内部にのみ在るアプリアリな現実を探求する。
4. 物語とは単なる逸話ではなく、現実を変形したものの投影である。
5. 以上のような構想は、律動的な「言葉の幻覚」を通じてのみ、その表現が達成される。
6. 文学的創造者は、教科書や辞書によって課された言葉の第一の内実を分解する権利を有する。
7. 文学的創造者は、自身の手で形成した言葉を用い、既存の文法や統語の規則を黙殺する権利を有する。
8. 「言葉の連禱」は、独立した単位として認められる。
9. われらは社会科学の観念が普及することに関心を持つ者ではない。ただし、現在のイデオロギーから創造的要素を解放してくれる場合、その限りでない。
10. 時間とは打破すべき暴君である。
11. 作家は表現する。意思疎通するのではない。
12. 単純な読者は死すべし。

エミリー・アプター『翻訳地帯—新しい人文学の批評パラダイムにむけて』
(秋草俊一郎、今井亮一、坪野圭介、山辺弦訳)

※Web公開にあたり、著作権者の要請により出典追記しております。
翻訳地帯—新しい人文学の批評パラダイムにむけて
エミリー・アプター（著）
秋草俊一郎・今井亮一・坪野圭介・山辺弦（翻訳）
2018年 慶應義塾大学出版会

Ⅲ：以下の1～12の設問事項から5項目を選び、それぞれについて200字以内で説明せよ。

*記入は順不同でもよいが、設問項目番号は、解答欄左上の空欄に明記すること。

1. アナーキズム
2. 日本文芸家協会
3. ノーベル文学賞
4. 風俗壊乱と安寧秩序紊乱
5. 自由間接話法
6. パステイーシュ
7. 『失われた時を求めて』
8. 『ボヴァリー夫人』
9. 『地の果て 至上の時』
10. 小島信夫
11. ヴァルター・ベンヤミン
12. ロラン・バルト

Lined writing area with horizontal lines.

(次頁へ続く)

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

Lined writing area with horizontal lines.

(次頁へ続く)

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

